

寄書

ぐうたら兵衛の論

津川清平

「天狗になつてはいけぬ」と聞いては、自分の氣に食はぬ繪もほめて置き、「自信がなければならぬ」と言はれては、佳作の繪もけなしたくなる人は、矢張り自信が無いからだ。さう言ふ自分も其の一人かも知れぬ。

スタデーは緻密に畫くほど興味があり、スケッチは思ひ切つて主観を出すのに興味がある。各々出來たものは反對だが、自然の感想を畫き出すといふことには變りは無い。然し展覽會等で繪を見ると、繪畫にはもう少し他に目的があるやうに思ふ。

「考へ無しに畫いた繪は必ず失敗する」といふことは幾度も聞いた。聞いて居ながらつい忘れて、美しい景でも有るとすぐ畫きたくなる。さうして早く自然通りの色を出さうとする。爲めに繪具の水も干かぬ裡に次の色をなすくりつける。或はぼかす。従つて紙面を害しむらが出来繪具の光澤を失ふ。こんな失敗は度々やつたことだ。

他人の作を摸寫して得るところがあるやうになるのは、自分で苦心した後だ。始めから摸寫して繪を作る法などを知らうとしてもだめだつた。只其の人の不用な癖なんか附いたゞけてある。それよりも、飽くまで見て頭の中に位置や調子や色彩を憶えて置く方が良いやうに思はれる。摸寫は熱心にやるものぢやあない様だ。ために其の繪の印象を忘れても自然得るところが

ある。それが眞の得るところだと思ふ。何にしても大家の繪を見て、始めから複雑な繪を畫かうとしても畫けるものではない。先生方の言はれるやうに、墨繪の靜物から始めて、自分で苦心せれば、吾々凡人はさう安々と佳い繪は造れない。

先日大阪の三越洋畫展覽會へ行つて見た。石川先生の「桃の節句」の前には何時も人が寄つて居た。小學生が「内へ歸つてあんな繪を畫きに行かう」と力むで居た。展覽會が美術趣味を普及するの無理は無いと思つた。滿谷先生の「綠陰」を「薄つべらだ」と言つた人がある。「ちぎれ雲」中川先生作を「夕日を受けた雲が實に佳い」といふ人があれば「砂漠の様だ」と咳く人もある。「こんな繪を見るとかへつて害になる、と無闇に缺點も言はずにえらばる人もあつた。大下先生の「榛名湖」を見て、湖上の光線を。「黄粉がまいてある」と冷評した男があつたので、いま／＼しく思つて「水の色などあ特別佳い」と咳いてやつた。先生の御作では「後園」が一番佳作だと思つた。スケッチブックにわざ／＼摸寫して居る人があるので、覗いこ見たら小さい門や木が日本畫流に見取圖の様に畫いてあつた。

此の展覽會で驚いたのは、一年前の時より、思ひ切つて強い色の水彩畫が多かつた事だ。中には佳いものもあつたが、自分等の目には見えぬやうな、極端な色を使つて畫いた繪も多かつた。そんなのを見ると、其の人が強ひて使つたのかとも思はれ、或は自分の觀察力が足らぬのかと思はれる。日本畫の様に、色の淋しいのも時に見受けたが、自分は「高原の秋」(一二九)、や「須

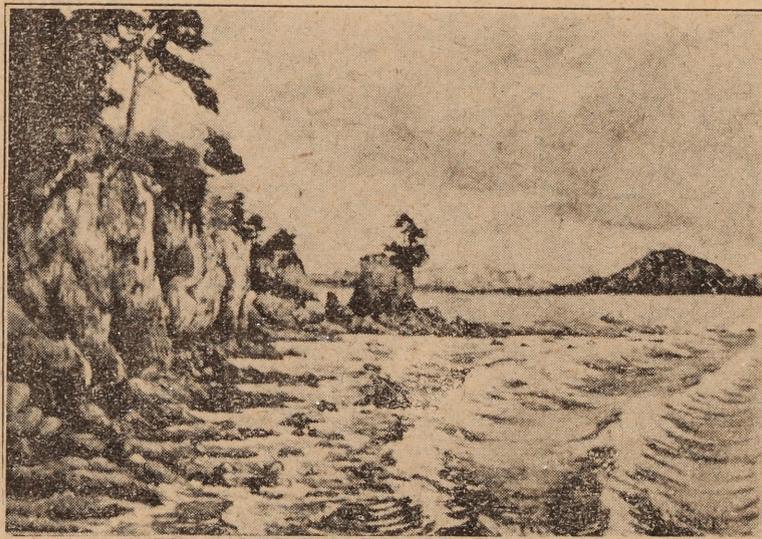
磨の浦(七四)の様な色彩の繪が好きだ。總て色彩の佳い繪で失敗するのは、矢張り色彩の様だ。否、そんな繪が多い様に見受けた。なんとか知つた顔のぐうたら兵衛を列べるのは實は知つて居ないのかも知れない。

余が野外寫生の端緒と所感

近江 金 森 宗 造

余が書生時代、丁度『みづゑ』第一號發行當時には、醫學の研究中であつた所が、醫學の解剖圖などを見ると、水彩畫の原色版で美しいのがやつてあるので、一つ摸寫して見んものと、十二色入七八十錢の學生用の畫具箱を求めて、畫いて見ると、便利なる記憶法であつたから、必要のものだけ模寫して、勉學の資とした。後皮膚病學教室へでも行くと、病者の皮膚の狀態色彩等の工合を記憶するの必要上、實物寫生の必要を感じて、ちよいと室内の寫生をする中に、繪畫に於ける趣味を覺へ、野外寫生の端緒を得た。

さて、野外に出て寫生して見ると、室内とは異りて、閉口したのは色彩なり陰影なりが時々變化すると、木の葉や幹の皮の龜裂迄一々書き現はすに如何にしてよきや、又近景の草木などの細部分が、眼に映じて大體の趣を現はす、



金 森 宗 造 筆

とか出來ぬのであつた。茲で『水彩畫葉』『みづゑ』等を見て研究しつゝあつた後、本業を此山間に營み傍ら爽快なる春の琵琶湖の風光に接し或は深山の風雪を寫して自然の趣を悟つた、以來余は自然を友とし師とし、傍ら『みづゑ』を指導者として愛讀してゐる。

楽しい一日

長野市花咲町

パ レ ッ ト

四月十八日。日曜日。快晴。セピヤクラの會員十名近くは約束の如く八時半妻科のお宮へ集合した。別役先生も見えて一行は安茂里村を指し春霞を排して出掛けた。際期の如く日本晴の好天氣、背はポカポカイやザリザリといやに暑い。丁度此の日は安茂里觀音のお祭なので行く人で目のまわる様だ。

汗臭い人と一所にゴタゴタになつて相生橋を渡つて行くと杏花は今が満開で安茂里一村は花で蔽はれ得も云はれぬ。淡紅濃白春の女神の色彩の巧なるを今更の様

に痛切に感じた。
ア、僕にあの女神の様な腕があつたら……右へ行けば觀音に
行くのだが一行は俗人(怒るだらうが)と別れて道を眞直に取り
田甫へ出て思ひ思ひの所へ腰を据える事にした。